

# 探訪 北の風景 86

## 薄紫の亜麻畑

石狩管内当別町

青木和弘

7月の朝、薄紫の可憐な花が一面に咲き、爽やかな風にゆれている。日の出とともに花を開き、午後には散ってしまう亜麻（あま）の花である。草丈60センチメートルほどの茎はリネンと呼ばれる薄い織物になり、種子からは亜麻仁油（あまにゆ）がとれる。

「亜麻色」というのは、花の色ではなく、灰色がかった薄茶色の繊維の色とされるが、「亜麻色の髪」が金髪の色だったり、黄色みをおびた茶色だったりして、イメージが異なることが多いようだ。

亜麻が日本に入ってきたのは江戸時代。葉として中国から輸入され栽培された記録がある。冷涼



な気候を好み北海道が適地で、本格的な栽培が始まるのは明治初期だ。1871（明治4）年、ロシア人のガルトネが現在の七飯町で試験栽培を行い、1874年、ロシア公使だった榎本武揚が北海道開拓使長官の黒田清隆にロシアの種子を送り、箱館（現函館市）郊外で栽培されている。

当別の亜麻栽培は1888（明治21）年に始まり、1893年に道内で3番目の製麻工場が新設されて作付けが増えた。工場では100人以上が働き、社宅には劇場や飲み屋街が並んでにぎやかだったという。繊維を作る製麻が軍需にも支えられ全道に広がり、1940年代には作付面積が約4万ヘクタール、製麻工場が85カ所もあった。

ところが、第二次大戦後、化学繊維に押され、1957年をピークに亜麻の生産は激減。60年代に道内の亜麻栽培はほぼ途絶えた。

亜麻の栽培は連作障害が起きやすいため6、7年の輪作を行う。4月末から5月にかけて種をまき、繊維用は7月から8月に収穫。種子用はそれより1、2週間遅く刈り取られる。

当別町で復活した亜麻栽培は、（株）北海道技術コンサルタント（本社・札幌、橋本眞一社長）が2001（平成13）年に始めた亜麻産業復活の試みがきっかけになった。公共工事の削減で受注が減る中、社員の雇用の受け皿になる事業を考えた。北海道の気候を生かした農業分野を模索し、かつて盛んだった亜麻に着目した。



亜麻畑の位置は「亜麻フォトコンテスト」のホームページにグーグルマップで紹介している。亜麻は輪作するので多少位置が変わるが、同一農家の農地内なので、ほぼ同じような場所になる。撮影の際は絶対に畑に入らないように注意してほしい

北海道で40年ぶりの亜麻栽培だから苦労した。試験栽培で、質の高い繊維を作るにはそれなりの設備が必要だと分かったが、国内に使えるものがない。そこで、種から取れる亜麻仁油の商品化に方針を定めた。そして2002年2月、雪深い札幌近郊の農家を回り契約栽培を頼み込むのだが、次々と断られ続けた。最後にたどり着いたのが、アイガモ農法や減農薬農法を進めていた大塚農場だった。「失敗しても」と「0・1ヘクタールだけ契約栽培に応じた」という。無農薬を基本にする同農場では、害虫駆除や雑草取り、根浅で倒れやすい植え付け方法に工夫するなど、栽培法の確立にも試行錯誤を繰り返した。

橋本社長は2004年、有限会社亜麻公社を設



午前5時過ぎからつぼみがふくらみ始め5時15分ごろから咲き始める。6時には満開になるが、花は午後には散ってしまう。翌朝は新たなつぼみが花開く。見ごろは7月上旬から中旬だ



薄紫の可憐な花は、朝開いて、午後には散ってしまう。そのはかなさに思いを寄せるファンも多いようだ。花は草丈約60センチほどの上の方にだけ付き、夏風に揺られている

立。栽培農家も2007年、当別亜麻生産組合を組織して本格的な栽培と製品製造体制が確立した。亜麻仁油製品では、2005年発売の北海道産「亜麻仁油サプリメント」がヒット商品になった。亜麻仁油には不飽和脂肪酸が豊富で、中性脂肪やコレステロール値の改善が期待される。外国産が多い中、「100%道産」というのが歓迎されている。同社の製品は、通信販売や「道の駅とうべつ」などで販売されている。

今年の「亜麻まつり」は中止になったが、町内の「亜麻カフェイン当別」は開かれる。亜麻畑の位置は、当別町観光協会のホームページなどで紹介されるが、今年は新型コロナウイルスの流行で見送られるようだ。